

う専門的興味によって長松の足跡を調べはじめたのであるが、私はしだいに彼の全く風変わりな人生そのものにも強くひかれはじめた。いまだに十分な資料が得られないのは残念であるが、太郎氏未亡人長松治子夫人はじめ、学習院後藤幹保教授、大阪市立大学石附実教授および付属図書館岸田絹子司書、植物学会石川光絵氏、中川浩一氏、岡部昭彦氏、岩波書店浦部信義氏、山口市矢原の皆さん、には多くの貴重な資料や情報の提供を頂いた。この機会に厚く御礼申し上げる。(保険研究所「Insurance」3151号、22-23ページ、1984)

### 「シンガポール植物園と郡場寛先生」

はじめに

かねて私はシンガポール植物園を訪ねたいと思っていた。その理由は2つあった。主には京都大学理学部植物生理学教授だった郡場寛先生の足跡を尋ねることで、それは「国際生物学賞」第1回受賞者となったコーナー博士(E. J. H. Corner)の「思い出の昭南博物館」によって強められた私の長年の希望であった。実は数年前、同地へ出かける予定で航空券とホテルまで予約したが、急に公務が生じたため結局家内だけがシンガポールに行き、私の代わりに植物園を訪ねた。「私の夫は郡場先生の孫弟子です」と言って自己紹介したところ、丁重にもてなしてくれ、記念の印刷物等を頂戴して帰ってきた。そのとき、同植物園では今も郡場先生が忘れられていないことを知った。

同植物園を訪れるもう一つの理由は、同植物園で育成したパラゴムの木、あるいはその子孫を見たいことであった。イギリスがブラジルからパラゴムの種子を密輸出し、ロンドンのキュー植物園で発芽させた幼植物を植民地製作のためにセイロンやシンガポールに移植した。

たまたま私の大阪市立大学在任中に留学し、私の退官後に後任の神阪盛一郎教授によって学位を得た陳嘉寿君がシンガポールにおり、一度来てほしいと言っていたので、今年の正月休みに同地を訪れた。

#### 1. シンガポール植物園

日本、とくに大阪の好きな陳嘉寿君は半ズボンに下駄履きで私たちのホテルへ迎えに現われた。そして、彼の車で今や50ヘクタールを越す敷地を誇るシンガポール植物園を訪れたのは1月8日であった。嘉寿君の友人で同植物園の事務官であるYee嬢の紹介で副園長に会った。植物園の人達は郡場先生の名を聞くとニコニコし、大変丁重に対応してくれ、半世紀を経た今も植物園の人たちが先生を尊敬し、そして先生に親しみをもっていることが肌身に感じられた。コーナー博士や郡場先生の時代のまま残っている研究棟もあり、「思い出の昭南博物館」173ページに掲載されている写真の研究室はそのままであった。さらに、戦後建てられた事務棟の廊下ホールには歴代園長らの写真があり、そこには郡場先生の写真も園長だったホルタム博士やコーナー博士ら歴代園長の写真と並んで掲げられていた。

#### 2. 郡場先生と“昭南島”

郡場寛先生の人と業績についてここで詳しく述べることはできないが、先生は三好学門下で、その助手を勤め、東北帝国大学農科大学(札幌)教授をへて外遊の後、1920年(大正9年)京都帝国大学理学部教授(植物生理学講座)となった。1942年(昭和17年9月26日)60歳の

とき京都大学を定年退官され、11月25日に陸軍司政官としてマレーに赴任された。シンガポールは1941年12月大東亜戦争開戦直後の1942年2月15日に日本軍が英国軍を破って占領し、これを「昭南島」と改称した。郡場先生はマレー軍政監部総務部勤務となり、1942年12月、昭南植物園長に任じられた。翌年には昭南博物館長にもなられ、両園の資料保存や管理運営に努められたが、1945年8月の終戦とともに連合軍の捕虜となり、収容所に入った。終戦前、日本の配色が濃厚となったとき、軍の要務に就いておられた先生は、帰国しようと思えば可能である地位についておられたにもかかわらず、責任感から昭南島に留まり、あえて捕虜になられた。しかし、幸いにも翌1946年1月末、復員され、京都帝国大学名誉教授とされた。私の学生時代、植物学教室の図書室に週に一回くらい来られ、われわれ植物学科の学生にも東北弁で気さくに声をかけられたことを思い出す。1954年（昭和29年）2月に弘前大学学長になられたが、約4年後の1957年12月14日、入浴中に倒れ、15日に亡くなった。75歳であった。

### 3. ラッフルズとシンガポール植物園

シンガポールを語る時、ラッフルズ卿を省くことはできない。Sir Thomas Stamford Raffles (1781-1826) は英国東インド植民地会社の植民地行政官であった。ナポレオン戦争に乗じてインド総督に進言し、1811年にジャワ島を占領したうえ、その副総督になった。戦後同地がオランダに返還されたので彼の植民地政策は挫折したが、スマトラ島の知事となり、シンガポールの重要性を見抜き、再び東インド会社を説得して1819年に同地を占領して植民地とし、1924年にシンガポールを英国領とすることによって、19世紀イギリスの東アジア侵略の拠点とした。

ラッフルズ卿が植物園を作ろうというアイデアを持ったのは、英国が同地を占領した1819年といわれる。そもそもヨーロッパ列強が東南アジアで植物園を作ることには目的が二つあった。1つは、珍しい熱帯植物の標本を集め、本国に持ち帰ること、2つめは、利益を生む作物や鑑賞植物を育成し、その地特有の植物を研究、保存することである。この目的のために作られた植物園としては、ジャワ（インドネシア）の Bogor 植物園がシンガポール植物園とともに有名である。

シンガポール植物園の場合、ロンドンの王立植物園 (Kew Botanic Gardens) と王立協会 (Royal Society) 会長であった植物学者バンクス卿 (Sir Joseph Banks) が深く関わっている。植物園建設にあたってはバンクスはラッフルズに多くの建言をしたが、結局ラッフルズ卿の出資により、シンガポール市の東にある Government Hill に19エーカーの植物園が建設されたのは1822年のことである。その後敷地を広げ、変遷を重ねたが、農業園芸が中心でラッフルズ卿の理想とする科学的な目的をもった植物園の体裁はなかなかできなかった。1859年に至り、シンガポールの有力な事業家 Hoo Ah Kay (Whampoa) の援助を得て、その所有地である Tanglin という場所の23ヘクタールの土地に植物園は移転した。ここは現在は Chuny Road というアドレスである。Kay はシンガポールの農業園芸協会の設立にも尽くした人物であった。

### 4. 植物園と植民地政策、および大東亜戦争

その後 H. J. フッカー (Hooker) などキュー植物園の推薦で H. J. マートン (Murton) が園長として勤めた時代、植物園は Hill から Tanglin に1875年までに完全に移転し以後発展を続けた。このあとパラゴム密輸事件がおこり、キューからセイロン王立植物園やシンガポール植

物園にその苗木が移植され、ゴム産業が発達するに至った。この事件については本稿では省くが、シンガポール植物園のゴムの「母の木」はのちに枯死し、現在は「パラゴム移植記念碑」が建てられ、別のゴムの大木があった。植物園におけるゴム産業に腕を振るったのは 1888 年から 25 年間、園長を勤めた H. N. リドレイ(Ridley)で、“マレーのゴム産業の父”と呼ばれるほどゴム産業を英国のために振興した。彼はまた、熱帯植物学の研究とその経済的応用のセンターとしてのシンガポール植物園の国際的名声を確立した。

1925 年に至り、E. ホルタム (Holttum) が園長となり、戦後の 1949 年まで在任したが、園芸植物、とくにランの育成に努めた。彼はさらに、ここでタケ、ショウガなど、単子葉植物の育成も試み、これらの結果を数冊の本として出版した。ホルタム博士の副園長として働いたのは E. J. H. コーナー博士で、植物の収集と野外植物学を専門とした。彼は植物の収集にある種のサルを用いるなどユニークな研究方法を採った。

1942 年 2 月シンガポールの英軍は山下奉文將軍率いる日本軍に降伏し、この都市は陥落した。軍の命令により、東北帝国大学講師で地質学者の田中館秀三が博物館と植物園の管理をすることになったが、彼はホルタム園長に植物園業務を続け、戦争による混乱からの回復に努めるよう求めた。1942 年 12 月、郡場先生が園長として赴任したときホルタム博士の園長としての任務は公式には終わったが、なおホルタム博士とコーナー博士は園に留まって郡場園長を助けた。この時、郡場先生が彼らを捕虜としてでなく、対等の植物学研究者として扱った様子は「思い出の昭南博物館」に詳しい。これについてはあとで述べることにする。なお、当時の軍政顧問で植物学者の徳川義親侯爵が植物園の名誉園長と博物館の名誉館長を勤めた。戦後、ホルタム博士退任後、イギリスから園長が赴任し、発展を遂げながら時が過ぎたが、シンガポールはやがて独立し、現在に至っている。そしてその敷地も 30 ヘクタールから最近 50 ヘクタール余りに拡張し、ますます立派な植物園に発展してきた。現在の園長は Tan Wee Kiat 博士で、副園長は事務職でアメリカ人の Coffin 氏である。

##### 5. 徳川義親侯爵 (The Marquis)

「思い出の昭南博物館」の原題は “The Marquis” (侯爵) である。すなわち、植物園の名誉園長と博物館の名誉館長を勤めた徳川義親侯爵のことを指している。私たち植物生理学研究者には同侯爵は「徳川生物学研究所」(研究所の初代所長は後に京都帝国大学植物細胞学教授となった桑田義備であった<これらに就いては田宮博ら「徳研盛衰記」自然、1970 年 9 月号、に詳しい>。これらに関し、御教示下さった神谷宣郎先生に感謝する) 創設者として認識されているであろう。徳川侯爵は、井伊直弼と対立した元越前藩主松平慶永 (春獄) の息子で (1886 年生まれ)、2 歳のとき尾張徳川家 (当主義礼) の養子となり、東京帝国大学文学部史学科卒業後、理学部植物学科を卒業した。若くから多彩な活動をしたが、政治的にもかなり派手に動いた。戦前は二二六事件や右翼クーデターに関与したり、「大東亜共栄圏」を理想として日本の南方進出を理想目標とした。彼はシンガポールに出掛け、そこで日本の南方進出に力を尽くすことを早くから望んでいた。1914 年 (大正 3 年) 武蔵小山に「徳川生物学研究所」を設立し、大学時代の恩師、服部広太郎東京帝国大学講師 (細菌学) を所長に迎えた (大正 8 年、研究所は目白に移転した)。服部は東宮御学問所が設置されたとき、当時の皇太子 (昭和天皇) の博物学教師

として迎えられ、即位後も皇室生物学御研究所で指導的役割を果たした。この研究所で有名なのは服部のあと所長となった田宮博教授のクロレラに関する研究であろう。しかし、第2次大戦末期には陸軍の求めによりこの研究所は新兵器開発のための研究に従事せざるをえなかった。徳川侯爵は徹底抗戦論者で、1944年つまり敗戦1年前に軍政顧問を辞任して帰国し新兵器開発を提案し、熱意を燃やしたという。このとき、研究所は服部所長のもとに柴田桂太、田宮博あるいは奥貫一男博士らそうそうたる研究者を揃えていた。

1945年8月15日ポツダム宣言受諾のさい徳川侯爵は国体護持のため天皇退位を唱え、また旧日本無産党グループに協力して日本社会党の結成を援助した。しかし、その奮闘も空しく、占領軍によって華族制度は崩壊し、徳川侯爵は戦争犯罪人とはならなかったが、社会的権威も莫大な財産も失った。戦後占領軍によって民主主義の時代となったが、その精神は彼の性に合わないと思懐したという。

## 6. コーナー博士著「思い出の昭南島」

コーナー博士は先年、生物学者でもあった昭和天皇を記念して設けられた「国際生物学賞」の第一回受賞者に選ばれ、1985年11月、日本学士院でおこなわれた受賞式に出席のため来日した。この本では、1. シンガポール陥落、2. 昭南島、3. 侯爵、4. 終局、5. 再会、と大東亜戦争開戦から終戦に至るまでのシンガポール植物園の出来事がのべられている。とくに、田中館博士、徳川侯爵、そして郡場教授がいかに植物園や博物館の資料散逸を防ぎ、その保全に努め、そしてホルタム博士やコーナー博士に対し、いかに研究者として接したか、これに対しコーナー博士がいかに感謝の念をもったか、などが詳しく記述されている。当時、緒戦の大勝に浮かれ、敵を侮っていた日本軍と異なり、これらの日本人学者が占領地で捕虜となった研究者に対してとった態度は信じ難いほどの立派さである。以下、郡場先生に関する記述を少々引用したい。

### “郡場教授とピストル”

“植物園の二階の研究室で、3時30分ごろになると、きまって郡場教授は椅子を後にひき、立ち上がった。私も立ち上がり、互いにお辞儀をした。

「コーナーさん、私は帰ります」

と言うと教授は部屋を出ていった。いつも本の詰まった風呂敷包みと研究ノートのはいった革のブリーフケースを手に。

ある午後、階下から軍靴の近づいてくる足音がした。足音は階段を駆け上がるとわたしたちのいる部屋にはいつてきた。郡場教授と二人の見知らぬ憲兵とのあいだに長い議論が交された。教授は何やらぶつぶつ言って二人の言葉をときおり遮っていた。それから背後でピストルのかちっという音がした。憲兵は部屋を出ていった。郡場教授は黙っていた。私はこの会見の間じゅう背を向けて座っていて、一度もふりむかなかった。しばらくすると教授はいつものように椅子を後に引く音がした。そしてその日は、いつものさよならの儀式をせずに（原文では「いつものさよならの儀式を『して』…とある）部屋から出ていった。私は振りむいた。教授の机の上にピストルが一丁、弾薬の小さな箱とともに載っていた。明かにあの二人の憲兵は教授にピストルをつかうときとその使い方を教えていたのであった。（中略）私は現地人職員と、その

ほかの職員を研究室に召集した。ピストルを指しながら、いましがたこの部屋で起きたことを説明し、ピストルに触れる者がいたら即刻憲兵に報告すると申し渡した。ピストルはその年(1945年)の9月、私がアーケイ大佐に手渡すまで教授の机の上に置かれたままであった。机の隅におしやられ、紙のおおいをかぶってはいたが。

郡場教授はピストルのことには一言も触れなかった。昭南島をおおう不吉な雲は次第に重くなってきたが、私たちの彼に対する信頼はけっして揺らぐことはなかつた。敗戦という土壇場に立ち合わずとも、年齢からいっても地位からいってもいつでも職を退き、捕虜や抑留者になる運命から逃げることはできたはずである。だが、彼の正義感と仕事への強い義務感は、彼を最後まで植物園に踏み止まらせた。安易な道より、いさぎよく抑留者になる道を選んだのである。”  
おわりに

今の若い世代の会員のほとんどのかたは郡場寛先生の経歴や業績を知らないであろう。先生の師で、日本で初の植物生理学講座の教授となった東京大学三好学博士についても同様でないかと私は想像する。戦争という異常な状況にあつて、軍の支配のもと、なおも研究を続け、敵国の研究者を同僚として扱い憲兵から守る、ということは普通では出来ないことであろう。私も戦時中に中学生で、軍隊や憲兵に抵抗することがいかに困難であつたかを想像することができる。コーナー博士の本を読み、改めて郡場先生の立派さを認識し、さらに今回シンガポール植物園を訪れた機会に現在でも園の人たちが先生を尊敬と親愛の情をもって覚えており、写真を掲げて敬意を払っていることを目のあたりに見る機会をもつたことは、大変に嬉しいことであつた。コーナー博士の『思い出の昭南博物館』を一読し、シンガポールを訪れる機会があれば、ぜひ植物園を見学されるよう会員の皆さんにお勧めしたい。同市の清潔な町並みと美しい緑も気持ち良く、私たちの環境改善にも参考になるように思う。(日本植物生理学会通信 58:12-15、1993)

#### 「坂村 徹先生の植物生理学」

先年来日した西ドイツ、チュービンゲン大学のビュンニング (Erwin Bünning) 教授の著書 “Wilhelm Pfeffer” (1975) の 93-95 頁に『Die Leistungen dieser Mitarbeiter dargestellt, hiesse, ein Stück Geschichte der Pflanzenphysiologie von Pfeffer bis zur Gegenwart schreiben. Begnügen wir uns mit einem Beispiel: Keita Shibata aus Tokio...』ではじまる部分がある。ここでビュンニング教授は柴田桂太先生がライプチヒに留学の目的で北大農学部(当時は東北帝大農科大学)から東京へ帰り、ライプチヒそしてフランクフルトで学んで帰国した後、Acta Phytochimica を創刊し、日本における植物生理学、生理化学にペファアの学風を伝えたことを書いている。ペファアは世界各国から集まった合計 265 名の門下生を教育したそうで、なかでもアメリカから多くの学生がライプチヒに集まった。ペファアのもとに初めて学んだ日本の植物学者は三好学先生で、三好先生はわが国の植物生理の創始者といえるであろう。柴田先生について大野直枝先生もペファアのもとに学び、さらに郡場寛先生もライプチヒに学ぼうとしていた。出発直前に第一次大戦勃発のため欧州航路が停止となったため、郡場先生がアメリカ遊学ののち、大戦終了後大西洋を渡って欧州に到着し、ライプチヒの土をふんだとき